第6回　ソフト・パワー

（1）パワーの概念

H.J.モーゲンソー (Hans J. Morgenthau, 1904-1980)は *Politics among Nations* (1948, 1954, 1960, 1967, 1973, 1978, 1982)で国際政治の基調は各国による権力闘争であると主張した。そのことは副題 “The Struggle for Power and Peace” からも垣間見える。

①「パワー」とは何か。

パワー(power)について猪口孝他編『国際政治学事典』(2005〉には以下のような定義が示されている。

> 〔定義〕政治学において、パワーは通常、「力源」と「影響力」との両者分けられる。前者は権力が行使される際にどれだけの資源・資質がアクターに備わっているかに焦点を当てるものである。（中略）後者の「影響力」は、力源の大小は別次元として、パワーが行使された事実をアクターの行動の変化や政策内容に重点を置いて判断する立場である。(1)

さらに具体的な定義としては次のようなものがある。

> パワーとは、相手国を自国の意思に従わせる力のことである。自国の意思を押しつけるには、軍事力の行使とその脅しが有効である（と思われている)。相手国の好意と同意を得るには、利益を与える経済力と、相手を説得する外交力が重要である。さらに、相手国に気づかれないか形で、それら諸国の行動に影響を与えるものとして、国際的ルールの設定や世界的文化の支配を通じてヘゲモニーの力が有効である。(2)

軍事による領土獲得時代が終わると、それまでの軍事大国の発言力と影響力がすべてではなくなった。パワーにおける軍事力の比重が減って来たのであ

る。重視されるようになったのは、経済力である。

②バランス・オブ・パワー

パワー＝軍事力の時代には勢力衡システムは軍事同盟などが重要であった。

> 一国がその軍事力を補強するために、他の国（々）と軍事同盟を結ぶことは、東西古今、諸国の政策である。近代ヨーロッパでは、勢力均衡(balance of power)システムが国際的に承認された原則となっていた。(3)

J.フランケル(Joseph Frankel, 1913-)は「バランス・オブ・パワー」について次のように述べている。

> 「バランス・オブ・パワー」という表現は、ある学者によって、多くの社会的分野や物理的領域にも、国際社会にも見出される均衡状態への傾向を示すために用いられている。また、この表現は、均衡をめざす国内政治の動きを意味することもある。(4)

ただし、フランケルは1648年～1914年までの国際政治体系に与えられた名称としている。1648年とはウェストファリア講話条約締結の年である。

さらにフランケルの定義を見てみよう。

> バランス・オブ・パワーは、それまでのどんな体系に比べても、はるかによく工夫された周到な体系であった。構成諸国は、この体系が課する規範に必ずしも進んで遵守する態度をとっていなかったにせよ、少なくとも、他国によって破壊されないようこれかれの規範を保護することに、自分たちの共通の利益があると意識していた。ある国が権力を獲得しようとして行動を起こせば、他の諸国は防衛のため力を結集するのが常であった。(5)

モーゲンソーはバランス・オブ・パワーについて次のように述べている。

力を求めようとする諸国家―それぞれの国は現状を維持あるいは打破しようとしているのだが―の熱望は、バランス・オブ・パワーと呼ばれる形態と、その形態の保持を目ざす政策とを必然的に生み出すものである。(6)

このバランス・オブ・パワーについてさらに注釈において次のように説明している。

バランス・オブ・パワーは普遍的な社会現象であるが、その機能および効果は国内政治と国際政治では異なる、ということは指摘するまでもない。国内政治において、バランス・オブ・パワーは、次のようなところで作用する。つまり、強いコンセンサスと、通常では挑戦し難いような中央政府の力とによってまとめられている統合社会の比較的安定した枠組みのなかでそれは作用する。一方、コンセンサスが弱く、また中心的権威の存在しない国際舞台においては、その社会の安定と構成部分の自由は、バランス・オブ・パワーの作用に、より大きく依存することになる。(7)

今一度、「パワー」そのものについて考えると、重要視されるものが軍事力から経済力、文化力へと変化してきているようだ。パワーの内容によりハード・パワー、ソフト・パワーといった用語もあるのだ。

（2）ジョセフ・サミュエル・ナイ、Jr.

①プロフィール

ソフト・パワー (soft power)の概念を打ち立てたのはジョセフ・サミュエル・ナイ・ジュニア(Joseph Samuel Nye, Jr. 1937-)である。

ナイの造語である「ソフト・パワー」も必ずしも新しい概念ではないが、

パワーを軍事力やＧＮＰなど物的なものでアクターを動かすことだと考えていた人々にとっては新鮮さがあった。(8)

ナイは一般的に「ソフト・パワー」の提唱者として紹介されることが多いが、ナイとはどんな人物であろうか。

Joseph S. Nye Jr., University Distinguished Service Professor, is also the Sultan of Oman Professor of International Relations and former Dean of the Kennedy School. He received his bachelor's degree summa cum laude from Princeton University, did post-graduate work at Oxford University on a Rhodes Scholarship, and earned a PhD in political science from Harvard. He has served as Assistant Secretary of Defense for International Security Affairs, Chair of the National Intelligence Council, and Deputy Under Secretary of State for Security Assistance, Science and Technology. In 2004, he published *Soft Power: The Means to Success in World Politics*; *Understanding International Conflict* (5th edition); and *The Power Game: A Washington Novel*. (9)

1964 年に国際問題研究研究所（現在のウェザーヘッド国際問題研究所）のディレクターに就任し、その後はカーター政権下では国務次官補、エネルギー省核拡散防止に関する安全保障グループ議長、国家情報会議議長などを歴任。1994 年～1995 年にはクリントン政権下では安全保障担当国防次官補を務め、「東アジア戦略報告」（ナイ・レポート）を作成したことでも知られている。また、2000 年には対日外交に関する提言としてリチャード・アーミテージ(Richard Lee Armitage, b.1945)らと超党派で作成した「アーミテージ・レポート」、2007 年にも「日米同盟―2020 年に向かってのアジアの構築（U.S.-Japan Alliance: Getting Asia Right through 2020」のとりまとめを行った。

②おもな著作

翻訳の出版されているいないものもあるが、幾つか紹介しておきたい。

Pan-Africanism and East African Integration, (Harvard University Press, 1966).

Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization, (Little, Brown, 1971).

Nuclear Ethics, (Free Press, 1986).

土山實男訳『核戦略と倫理』(同文舘出版, 1988 年)

Bound to Lead: the Changing Nature of American Power, (Basic Books, 1990).

久保伸太郎訳『不滅の大国アメリカ』(読売新聞社, 1990 年)

Understanding International Conflicts: An Introduction to Theory and History, (HarperCollins, 1993, 2nd ed. 1997, 3rd ed., 2000, 4th ed., 2003, 5th ed., 2005, 6th ed., 2007, 7th ed., 2009)

田中明彦・村田晃嗣訳『国際紛争――理論と歴史』(有斐閣, 2002 年／原書 4 版, 2003 年／原書 5 版, 2005 年／原書 6 版, 2007 年／原書 7 版, 2009 年)

The Paradox of American Power: Why the World's Only Superpower can't Go It Alone, (Oxford University Press, 2002).

山岡洋一訳『アメリカへの警告――21 世紀国際政治のパワー・ゲーム』(日本経済新聞社, 2002 年)

Soft Power: The Means to Success in World Politics, (Perseus Books Group, 2004).

山岡洋一訳『ソフト・パワー――21 世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞社, 2004 年)

Power in the Global Information Age: From Realism to Globalization, (Routledge, 2004).

The Powers to Lead, (Oxford University Press, 2008).

北沢格訳『リーダー・パワー――21 世紀型組織の主導者のために』(日本

経済新聞社、2008 年）

上記のものには共著や編著のものは含まれていない。

（3）ソフト・パワーとは何か

ジョセフ・ナイが提唱した「ソフト・パワー」については以下のように説明されている。

> 本来、「影響力」としてのパワーは、他者にある行動を取らせる「行為としてのパワー」の側面が大きかったが、「ソフト・パワー」は他者が自発的にある行動を取るようにするための「不作為としてのパワー」とも言える概念であり、そうした概念が重要視されていること自体、国際政治環境の変化とそれに伴うパワー概念の継続的な変容を示していると言える。(10)

彼の実際の著述、*Bound to Lead: The Changing Nature of American Power* (1990)は『不滅の大国アメリカ』（読売新聞社、1990 年 10 月）として久保伸太郎(1944-)によってすでに翻訳されている。同書では次のような記述がある。

> …the universalism of a country's culture and its ability to establish a set of favorable rules and institutions that govern areas of international activity are critical sources of power. As we shall see in greater detail in chapter 6, these soft sources of power are becoming more important in world politics today.
>
> Such considerations question the conclusion that the world is about to enter a Japanese ear in world politics. The nature of about to enter is changing and some of the changes will favor Japan, but some of them may favor the United States even more. (11)

一国の持つ文化の普遍性と、国際的活動の領域を取り仕切るルールや制度を有利に確立できる能力とが、決定的な力の源泉なのである。第六章で詳述するが、こうした力の源泉のソフトな面は、今日の世界の政治にあっては、ますます重要になりつつある。

このような考え方は、政治のうえで世界が日本の時代に入ろうとしているとの結論に疑問をさしはさむ。力の本質は変わりつつあり、その変化のある部分は日本にとって有利に働くだろう。(12)

ナイのソフト・パワー概念の変遷はどうなっているのだろうか。

よく知られているように、soft power 概念はポール・ケネディに代表されるアメリカ覇権衰退論への反論として、ジョセフ・ナイが 1990 年に"The Misleading Metaphor of Decline"で使ったのが最初である。彼は、それに続く"The Changing Nature of World Power"で同概念を精錬し、*Bound to Lead* (1990)において初期版の鋳型を完成させた。その時点での「ソフト・パワー」の概念構成は、どのようなものであろうか。

(省略)"The Changing Nature of World Power"論文の注の部分で、ナイが初めて体系的に soft power 概念を導出した部分である。ナイは当初、(1) soft power resources と hard power resources という、力の資源の分類と、(2) direct power behavior と co-optive (indirect) power behavior という力の性格の分類を提示していた。(13)

詳細な分析については、上記でも引用した芝崎厚士「国際文化現象としての国際関係研究―ソフト・パワー概念を中心に―」(2007)がよい参考となる。

Bound To Lead (1990)、*The Paradox of American Power* (2002)でもソフト・パワーについて触れているが、*Soft Power: The Means To Success in World Politics* (2004)は『ソフト・パワー　21 世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞出版社、2004 年 9 月）として山岡洋一(1941-)によって

翻訳され、すでに定着した言葉になっている。

> What is soft power? It is the ability to get what you want through attraction rather than coercion or payments. It arises from the attractiveness of a country's culture, political ideals, and policies.（14）

> ソフト・パワーとは何なのか。それは、強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力である。ソフト・パワーは国の文化、政治的な理想、政策の魅力によって生まれる。（15）

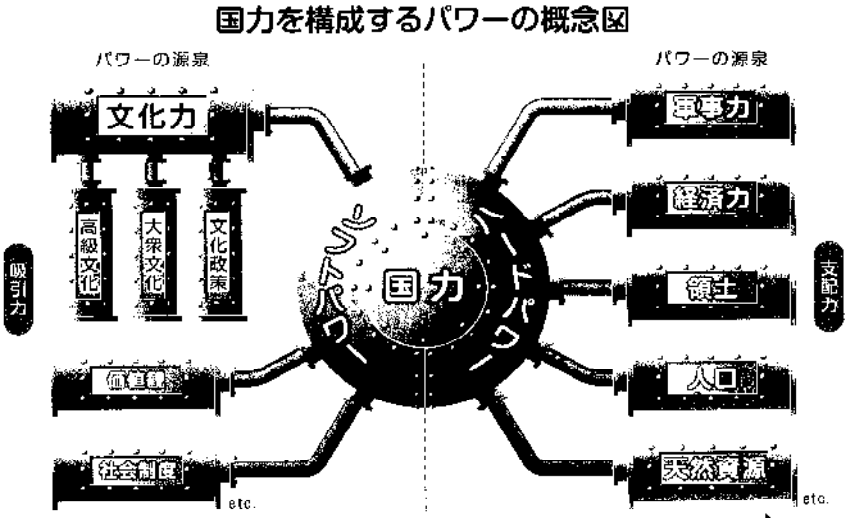
ナイは他の論文でも以下のように述べている。

> 本質的に、パワーとはほしいものを手にいれるために、他者に影響を及ぼす能力を意味しているにすぎませんが、これには一連の手段が必要です。威圧や報復といったハード・パワーを行使する手段もあれば、魅力といったソフト・パワーを使う方法もあります。
>
> 個人のレベルでは、カリスマ性（感情に訴える魅力）、ビジョン、コミュニケーションなどがソフト・パワーといえます。また国のレベルでは、ソフト・パワーはその国の文化、価値観、政策のなかで具現化されます。（16）

東西ベルリンの壁崩壊後、9・11 のアメリカの同時テロなど、軍事力に代表されるハード・パワーだけに頼る外交はもはや通用しないことははっきりしてきた。こうしたことはサミュエル・ハンチントン(Samuel P. Huntington, 1927-2010)の *The Clash of Civilizations*（1993）、*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*（1996）でも予言されていたことでもある。異文化の理解こそ重要ということになれば、ソフト・パワーのアイテムとして文化が注目を浴びるのも当然のことであろう。

最後に国力を軸にしてソフト・パワーとハード・パワーをわかりやすく示

した大薗友和作成の概念図(17)を紹介しておきたい。



大薗友和『世界「文化力戦争」大図解』(小学館、2008年8月)より

(4) ソフト・パワーとクール・ジャパン

サミュエル・ナイがソフト・パワー の概念を打ち立てたことはこれまで紹介してきた。ナイはさらにソフト・パワーとハード・パワーを組み合わせたスマート・パワーといったことも提唱している。これを国際関係論的見地からみると、パワーを行使することは、相手国が自国の望ましいように行動を変えてくれることを意味する。オーソドックスに言えば、日本のポップ・カルチャー、あるいは、クール・ジャパンが相手国で人気があるからといって、その国の政府が日本政府の望むような方向に舵を切るかどうかだ。更に言えば、次のようになろう。

> ある文化やソフトウェアに一定の支持があるとしても、それが生存や国家の興廃と直結しているハード・パワーに代替しうる力を発揮するかは

相当に疑問の余地からなる[18]

こうした伝統的なパワー概念に対して、クール・ジャパンが他の国で人気になることで対外関係にも良い影響をもたらす可能性が高いことも「ソフト・パワー」として考えてもよいとする広義の「ソフト・パワー」として捉えてもよいのではないだろうか。[19] マクグレイ論文(2002)の結論部分で“potential soft power”[20] との表現があるが、広義の「ソフト・パワー」を意味しているように考えられる。綿貫健治(1942–)はソフト・パワーの源泉を提供するのが「ソフト・パワー・インフラ」と名付け、以下のように述べている。(綿貫は「ソフトパワー」と表記)

> ソフトパワーがなければソフトパワー・コミュニケーションはできない。また、ソフトパワー・インフラが弱ければ、ソフトパワー・コミュニケーションの伝達力は弱い。したがって、日本がこれから国際戦略を強化するにはソフトパワー・インフラの整理整頓と強化が必要である。文化、芸術、ソフト、知財などかたちのあるものに対しては、政府の政策が出されているが、それを支える基本的な思想、方針、戦略がよくみえないのが現実である。[21]

ソフト・パワーとソフト・パワーのリソースの混同については、以下のような指摘もある。

> 巷では、ソフトパワーを単純なソフトコンテンツ産業振興の話や「外交」そのものと混同する向きのみならず、魅惑的なものなら何でもソフトパワーと称する風潮さえあるようだ。魅惑的なものはソフトパワーのリソースになり得るかもしれないが、それだけではソフトパワーたり得ない。[22]

では何が必要であろうか。

文化をソフトパワーとして捉えるためには、政策目標の特定が大前提となる。それなくしてはいかなるリソースもパワーに変換し得ない。(23)

フランスのジャーナリスト、ラファエル・マルカダル(Raphaëlle Marcadal)は国際交流基金が発行する『をちこち』（第 23 号、2008 年 6 月）で次のように述べている。

「ジャパン・クール」現象について言えば、これは日本が展開するソフトパワー主体の経済政策と切り離すことはできない。そして、この経済政策は日本の歴史そのものに由来する。というのも、第二次世界大戦後、日本は、武力の行使を禁じた平和憲法を米国から押しつけられたからである。軍事行動に訴える可能性を、つまり「ハードパワー」の可能性を奪われた日本は、産業開発に邁進した。そうした 80 年代に世界第 2 位の経済大国になった日本は、その後、マンガとテレビゲームの輸出を通じて、「ソフトパワー」のチャンピオンに君臨する。(24)

ここでのポイントは現象なのか、政策なのかといったところも重要なファクターであろう。

日本政府もソフト・パワーについて触れるところが多くなって来た。外務省ホームページの「よくある質問集」の「『パブリック・ディプロマシー』や『ソフト・パワー』とは何ですか。」には以下のような説明があるので紹介しておきたい。

「ソフト・パワー」という概念は、ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授によって最初に定義づけられました。同教授は、軍事力や経済力によって他国をその意に反して動かす力が「ハードパワー」であるのに対し、その国が持つ価値観や文化の魅力で相手を敬服させ、魅了することによって自分の望む方向に動かす力が「ソフト・パワー」であると説明しています。近年、日本には平和主義や伝統文化・現代文化など、ソフト・パワーの潜在力があり、これを引き出すことで世界における日本の地位

を高めようとの議論が行われています。(25)

また、外務省ホームページの「わかる！国際情勢」には「ハード・パワーとソフト・パワー」の説明があるので紹介しておきたい。

> 外交を行う際、軍事力や経済力といったハード・パワーが交渉を左右することはよくありますが、その国が持つ理念や文化の魅力も交渉の力になることがあります。こうした魅力や影響力はソフト・パワーと呼ばれています。マンガはまさに日本のソフト・パワーのひとつです。相手国政府だけを相手にするのではなく、相手国民に直接・間接に働きかけて自国のイメージを向上させ、これによって自国の政策への理解や支持を得やすくしたり、海外における自国民の安全の確保に繋げるという考え方があり、日本はこのような対市民外交にも力を入れています。これをパブリック・ディプロマシーと呼んでいます。(26)

考え方を転じれば、日本のソフト・パワー・アイテムの総称をマクグレイはクール・ジャパンと命名したと言ってもよいかもしれない。もちろん、マクブレイはパワーの概念ではなく、文化現象として命名したわけだが、その背景にはソフト・パワーの概念があることは、“potential soft power”の言葉をみても明らかである。

最後に 2010 年 5 月 19 日に文部科学省高等教育局が発表した「大学の国際化と大学間交流の促進について（資料１）」の「(10) 双方向型留学生政策の強化」を紹介しておきたい。

> 日本のソフトパワー(cool Japan）を活用した文化多様性促進に貢献する交流と、日本語交流の拡充 (27)

単純にソフト・パワー＝cool Japan としている点は問題はあるが、cool Japan もソフト・パワーの一部であることは間違いない。

注

(1) 伊藤剛「パワー」(猪口孝他編『国際政治学事典』弘文堂、2005 年 12 月)、p.806.

(2) 初瀬龍平「パワー・ポリティクス」(初瀬龍平他『国際関係キーワード』有斐閣、1997 年 8 月)， p.18.

(3) 初瀬龍平「勢力均衡」， p.20.

(4) フランケル／田中治男訳『国際関係論［新版］』(東京大学出版会、1989 年 3 月)，p.243.

(5) Ibid., pp.244-245.

(6) モーゲンソー／現代平和研究会訳『国際政治』(Ⅱ)(福村出版、1989 年 3 月)，p.180.

(7) Ibid., p.189.

(8) 北岡元「ナイ、ジョセフ」(猪口孝他編『国際政治学事典』弘文堂、2005 年 12 月)、p.713.

(9) http://www.hks.harvard.edu/about/faculty-staff-directory/joseph-nye (2010 年 3 月 5 日)

(10) 伊藤剛「パワー」(猪口孝他編『国際政治学事典』弘文堂、2005 年 12 月)、p.807.

(11) Nye, Joseph S. , Jr. *Bound to Lead: The Changing Nature of American Power* (New York: Basic Books, 1990), p.33.

(12) ジョセフ・S・ナイ／久保伸太郎訳『不滅の大国アメリカ』(読売新聞社、1990 年 10 月)、p.49.

(13) 芝崎厚士「国際文化現象としての国際関係研究―ソフト・パワー概念を中心に―」(『インターカルチャル』第 5 号、アカデミア出版、2007 年 6 月)、p.97.

(14) Nye, Jr. Joseph S. *Soft Power: The Means To Success in World Politics* (New York: Public Affairs, 2004), p.x

(15) ジョセフ・S・ナイ、Jr.／山岡洋一訳『ソフト・パワー 21 世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞出版社、2004 年 9 月)、p.10.

(16) ジョセフ・S・ナイ、Jr.／ダイアン・L・クーツ／編集部訳「ソフト・

パワーを使い分けるスマート・パワー」(『Harvard Business Review』第 34 巻第 2 号、2009 年 2 月)、p.108.
(17) 大薗友和『世界「文化力戦争」大図解』(小学館、2008 年 8 月)、p.2.
(18) 大濱裕「わが国の国力評価とソフトパワーについて(上)」(『国際金融』第 1139 号、財団法人外国為替貿易研究会、2005 年 2 月)、p.21.
(19) 蟹瀬誠一「序」(明治大学国際日本語学部編『「ニッポン学」の現在 —GENJI からクール・ジャパンへ』角川学芸出版、2008 年 5 月) , pp.4-5.
(20) McGray, Douglas."Japan's Gross National Cool"(*Foreign Policy*. May/June, 2002) p.54.
(21) 綿貫健治『ソフトパワー・コミュニケーション』(学文社、2007 年 12 月)、p.206.
(22) 本保芳明「省庁連携を深め、クール・ジャパンのイメージをより強く発信する」(『Forbes(日本版)』特集:外国人観光客を日本に呼び込め)(第 17 巻第 6 号、ぎょうせい、2008 年 6 月)、p.12.
(23) Ibid., p.14.
(24) マルカダル「『ジャパン・クール』に世界はなぜ熱狂するのか」(『をちこち』第 23 号、国際交流基金、2008 年 6 月)、p.61.
(25)「外務省　わかる!国際情勢 vol.14　国際漫画賞～日本ファンを増やそう」(http://www.mofa.gojp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol14)(2009 年 3 月 1 日)
(26) 「外務省　よくある質問集　広報・文化交流」(http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/comment/faq/pr/index.html) (2009 年 9 月
(27) 文部科学省高等教育局が発表した「大学の国際化と大学間交流の促進について(資料1)」(2010 年 5 月 19 日)